



43・1・26

学部祭における検閲強化（早大新島  
淳良氏の講演が禁止される）

2・8

東京国税局、日大本部と一一の全学  
部一二の代属高校の一斉監査を始め  
る。

4・5

経済学部会計課長富沢広が蒸発。

### △解説▽

一九五八年、古田重二良が日本大学の会頭とな  
り、その年九月「日本大学合理化改善案」を出  
す。これから日大一〇年間の圧殺と抵抗の歴史が  
始まるのである。この一〇年の間、日大一〇万の  
学生は一部の右翼体育会系学生を除いて、その全  
てが古田、そしてそれを囲む一部の理事者に弾圧  
され搾取され続けたのである。この時期のことは  
第一章第一節の日大闘争前史においてすでに詳し  
く解説してあるので省略するが、この期間に古田  
は、日本精神の、名の下に日大を教育の場ではな  
くして、営利追求の場、すなわち株式会社・日大  
コンツェルンとして拡大していった。

学生は一切の自治活動を抹殺し、反逆者に対し  
ては古田の私兵である右翼・体育会系暴力学生を  
さしむけ、また公安そこぬけのスパイ網を学内に  
作りあげて、学生そして教授会を監視した。この  
十年の間、テロ行為が公然と行なわれる暴力支配  
の恐怖政治の嵐が日大内を吹き荒れ、五〇〇人以  
上もはいる教室で行なわれる無能教授の講義、教  
授と一切、心のかよった対話が行なわれることの  
ない学生生活、顧問教授の名の下に監視付きで行

なわれる制約されたサークル活動等、高い授業料  
のわりには、あまり無味乾燥な大学生活に、学生  
は無力化し、教授はその本来の姿である学問の追  
求をわすれて、理事者の手先となり、私利私欲に  
没頭するのであった。しかしながらこのような圧  
殺の十年間にも抵抗の芽は、まったく芽ばえない  
わけではなかった。しかしせっかく芽ばえた抵抗  
の芽も、すぐに古田のもしくはその手先達の残虐  
な手によって摘みとられていつて成長することは  
なかった。たとえ少しは成長したとしても、開花  
し結実することはまったくなかったと言ってい  
だろう。数学科事件をはじめとして、哲学科事  
件、六時限制の問題、4・20の弾圧がそれらなの  
である。

ともかく古田の営利第一主義の下に行なわれた  
徹底した学生弾圧は、一応、いやほ完全に成功し  
てきたのである。まさに圧殺され抵抗し、再なる  
圧殺の一〇年間といえよう。しかしながら、現在  
このように革命的に行なわれている日大闘争の間  
接的な起爆原因は、この間に生まれたといえよう。  
日大闘争の芽は、深い土の中で徐々に徐々に大  
きくなりつつ暁を待っていたのである。

### 前奏曲（四月～五月二二日）

43・4・15

二〇億円の使途不明金（ヤミ給与）  
発覚

16

理工学部会計課徴収主任渡辺はる子  
が自殺。

18

教職員組合、古田会頭以下一六人の  
全理事の辞職を勧告。

5・16

学文連の第三部室の第一回合同討論  
会。

21

経済学部と短大経済学部との学生会  
経済地下ホールで討論会。

22

経短学生会、学生課前抗議集会、抗  
議文を採択、掲示は一方的にはがさ  
れる。

### △解説▽

長い長い弾圧一〇年間に過ぎて昭和四三年・一  
九六八年が明ける。大学を学問探求の場から、利  
潤追求の場とした古田理事会の営利第一主義貫徹  
の方針は、数々の内部矛盾を含みつつも、学園の  
暴力支配をもってしてそれを表面化することなく  
みごとに隠蔽してきたのであるが、この年の一月  
二六日、理工学部小野竹之助教授の不正入学事件  
が発覚する。この事件は腐敗しきった日大の古田  
体制を基盤にして起り、その一角を表面化した事  
件なのであるが、我々はこの事件を小野竹之助個  
人の問題として矮小化して、この事件が古田体制  
なくしては生まれ得なかった事を暴露しえず、こ  
の時点での蜂起は起こらなかった。しかしながら  
この時、事件は一〇万学生の心にまた一つのしこ  
りを残し、やがて起こるべき偉大なる蜂起への要  
因に加えられていった。

古田体制の矛盾から発覚した事件はこの一つに  
終らなかった。そしてこの巨大な闇の直接的起  
爆原因となつて。三四億円使途不明金問題の発覚  
である。四月一五日新聞紙上に発表されたこの事  
件は、やがてその巨大な環の中に含まれた数々の  
事件を表面化していった。「富沢会計課長、ナゾ



の失踪」「会計、経理のベテラン女子事務員の自殺」等はそれとてよい。これらのうち続く不正事件は、古田会頭の下、徹底した営利第一主義を方針とし、その為には手段を選ばぬ古田理事会と、それを支える各学部末端までゆきとどいた古田体制が、腐敗し墮落しきっている事を日大一〇万の学生、いや日本の全人民の前に暴露したのである。そしてその古田体制は、教育不在、学問不在の大学、自らの私兵である右翼体育系の暴力的学園支配をもって、一〇万学生の犠牲の上になりたっているのである。

学生から学問を奪い、思想研究の自由を奪い去っていたのは何か！それは独裁的古田営利第一主義体制であり、学生に自治を与えず、すべてを暴圧していたのは、古田体制の営利追求を維持する為の政策であった。

この事実を知った日大一〇万の学生は、長い間の怒りをこめて決起し、体育会右翼暴力団の非常識きわまる暴力の中で、初めての集会・デモ、そして全学バリケードストライキへと蜂起していくのである。

この間の活動として、文理学部においては応援団再募集問題、経済学部においては「建学の基」配布禁止、新入生移行生歓迎大会禁止問題等を継続して、大学当局による圧殺恐喝の中で、先進的学友による深夜のステッカーはり、また学文連等の討論と心死の地下活動が行なわれていった。喫茶店で、また下宿で、サークル・クラスに浸透しつつある学習会、討論会がもたれていった。そして大学当局は、このように先進的学友を中心とし

て、クラスサークルへ拡大され、やがては全学生にオルグ活動が浸透し、討論が湧き上がり始めると、数々の手段を使って、それらを圧殺し弾圧しようとした。古翼体育会系暴力学生のアテと恐喝はもちろん、文理学部においては、森脇学生指導委員長が、五月七日、各クラスの担任に配布され、学生自治の圧殺をさらに強化する事を企てられた。

### 展開・その一「五月二三日～六月一日」

43・5・23

経短学生会、地下ホールで抗議集会  
抗議文撤去に抗議、再度抗議文掲示、法学部の学友五〇名、地下ホールの抗議集会に合流。当局、シャッターをおろし学生を閉じ込める。

24

文理学部教授会、声明書を出す。  
経短学生会の地下ホール抗議集会に体育会系右翼がなぐりこみ、会場を占拠。校舎前抗議集会、法学部の学友二、〇〇〇名合流。錦花公園までデモ行進。団交集会に、体育会系右翼介入。法二号館前まで抗議デモ。法学部の学友二〇〇余名は自治委員総会に結集、三号館前で抗議集会、経一、三〇〇名参加。

43・5・25

法・三号館前集会五〇〇名。文理抗議集会。経済学部前集会に五、〇〇〇名結集。

27

文理闘争委結成。各学部集会。全学共闘会議結成。経済前集会。文理学

生会久米委員長、無届集会に参加しないようにと揭示。

28

各学部別に闘争委員会を結成。経済前全共闘集会三、〇〇〇名。三十一日の大衆団交を大学側に要求。

29

商学部で一、〇〇〇名集会。法学部学友一二〇名商学部へ支援デモ

30

学生会連合会、当局に要求事項揭示これに対して大学側、緊求理事会開催。

31

文闘委集会に体育会系学生がなぐりこみ、学友四名重傷、二時四〇分、文理へ経・法・芸等の学友六、〇〇〇名結集、大衆団交を要求。

6・1

法学部生、右翼に襲われる。本部前大衆団交要求集会八、〇〇〇名結集。六月一日の大衆団交を要求。法闘委のデモ隊に弾圧、怒った

4

法学部学友三〇〇名、本校内に突入医学部学生委員会、全共闘を承認。

5

農獣医、抗議集会。

6

法二部、抗議集会。芸、学長出席のもとで説明会開く。農獣医、公開説明会開催。

7

### △解説▽

五月二三日、経済学部において二、〇〇〇名の学友が決起し初めてデモ行進をした。これが世に言う「偉大なる二〇〇メートルデモ」である。この日から闘いは全面展開に入った。二三日に続いて、二五日には文理学部においても、初の抗議集



会が開かれ、その後の経済学部前の全学総決起集会には五、〇〇〇名の学友が結集した。そして二七日には全学共闘会議が結成され、二八日には各学部闘争委員会が結成された。全共闘議長には経済学部の秋田明大君が選出され、三一日の大衆団交を要求した。三一日まで連日の各学部総決起集会、全学総決起集会が開かれると共に、各学部では各学科・各学年そしてサークルの闘争委員会が結成され、組織活動の細分化、内実化と共にキャンパス・校舎にはビラが嵐のようにまかれ、校内の随所には討論の渦がまきおこった。

五月三一日、文理学部キャンパス大衆団交要求総決起集会が開かれたが、この日の文理学部以外の学友が到着する以前に、体育会系一部暴力部隊が文理の学友に襲いかかり、三〇数名が負傷、三名が入院した。その後、各学部（経・法・理・芸・農・商）が文理グラウンドに集結、その数は八、〇〇〇名に達した。団交要求が拒否されるや本館前に集った。体育系学生の壁を突破し、抗議の大デモンストレーション、下高井戸から甲州街道、そして明大和泉校舎まで延々と展開した。この日の体育系の暴力は激しく、多くのケガ人が出て、いちめい「血の五・三一」と言われる。

六月一日から六月十日に至るまでは、連日各学部において集会がもたれ、各クラス・サークルの討論集会がもたれた。この間、授業はほとんどポイコットされて、組織活動の内実化、情宣活動の内実化等が行なわれる。六月四日、本部前に一、〇〇〇名が結集して六月一日の大衆団交を要求この頃、神田三崎町は連日の日大生のデモ行進が

行なわれ、フルタ・タオセの声が聞かれぬ日はなかった。このような事態に対して、大学当局はあらゆる露骨な弾圧政策を行なった。五・三一の体育系学生に対する処分、そして六月四日には本部前に結集した一〇、〇〇〇名を越える学友の「古田出てこい」の要求に対して、一介の学生部長である細谷を対応させて「全共闘は正式の代表でないで話すことはない」「古田会頭は不在だから明日、秋田議長に連絡する」だのと言わせ、問題の矮小化をはかり、問題をすりかえようとした。就中、この日は靖国神社に一、〇〇〇名の右翼暴力部隊を結集させたり、本部内に三〇名を待機させたり、また経済学部屋上から学友に対してコーラのビンを投げさせたり、あらゆる闘争圧殺の手段を駆使した。しかしながら、長い長い眠りからさめて一度蜂起した学生の怒りを抹殺する事は、とうていできず、六月一〇日には全共闘は活動者会議の決定のもと、古田理事会が明日の大衆団交に出てこない場合には、バリケードストライキ闘争などを徹底化する一方、当然くるであろう体育会・暴力団を動員しての弾圧に抗して闘う行動隊を結成した。

## 第二期 実力闘争への突入

展開その二（六・一一～八・四）

43・6・11 経済学部前での全学総決起集会（一

〇、〇〇〇名結集）に体育会系右翼暴力学生が来襲、学友六〇余名が負

傷。午後五時近く、機動隊導入、全共闘を規制、暴行を加える。法三号館を占拠し、バリケード構築、スト突入。

12 経済、スト突入。経・文理等の学友が泊り込み。

13 学生会連合会、解散宣言。理工学部自治会解散。

14 文理教授会、理事会に勧告書提出。経バリケード、黒ヘルメットに襲撃され、学友一名負傷。

15 芸術学部教授会、要望書提出。文理学生会総会でスト決議、スト宣言後、スト突入。一号館占拠、バリケード構築。

16 経、スト中の学友に右翼が襲いかかり重傷。

17 法闘委主催学生大会で、法自治会リコールを確認。古田会頭と理事会が全共闘に予備折衝を申し込む。芸で学生と大学当局との討論会。

18 商、スト権確立。バリケードを構築してスト突入。芸にて、金丸理事と学生の討論会。

19 芸、スト宣言を行ない、スト突入。農獣医スト権確立。文理バリケードに黒ヘルメットのスト破り来襲。

20 商、スト突入、一号館占拠。

21 古田会頭、一九項目改善案発表。理工習志野学生総会にて、許可制度



撤廃を決議。

22 文理三島、スト権確立。法闘委、学部大衆団交要求の集会を開く。農獣医スト突入。

25 全共闘主催の大衆団交拒否に対する全学抗議集会を開く。夏休み策動粉碎統一集会で、夏休みスト体制の方針提起。法一館封鎖。

7・4 久米執行部弾劾集会(文理)。夏休み策動粉碎全学総決起集会。

5 理工習志野学生会、スト突入。

6 芸術学部機械隊現われる。

7 七・七・七夕総決起集会(文理)。古田会頭、理工五号館に現われる。予備折衝の確認。

8 理工自治会、教授学生の討論会を開く。理工スト突入。

10 使途不明金に関する国税局発表。日大教職組、特別調査会の調査結果を発表。

12 灘尾文相、記者会見で大学紛争について語る。

18 大衆団交の予備折衝が実質上流れる予備折衝で要求事項、誓約書の確認

20 全学集会後のデモで、機動隊、学友六八名不当検挙。

21 神田署へ抗議デモ、機動隊が学友六七名逮捕。

27 全学部OB会議、全共闘支援の集会とデモを行なう。文理、教授会との

大衆団交。

8・2 各学部総決起集会。全学総起集会、神田をデモ、機動隊の規制で八名検挙される。

8・4 大衆団交拒否抗議集会(法一館)

△解説▽

六月一日、この日から我々の闘いはまた新たな段階に突入する。大衆団交要求の最後の全学総決起集会が経済学部で行なわれた。そしてこの日は、日大闘争の歴史においても忘れる事のできない怒りと憎しみの日である。数百名の右翼暴力団と国家権力による学生に対する大暴虐が徹底した形で行なわれた。(日本刀、鉄パイプ、チェーン、木刀その他あらゆる殺人武器)非人間的右翼暴力団と国家権力によって傷ついた学友一三〇数名(うち、重傷者四〇名、全治二週間程度六〇名)苦痛を乗り越え、法学部三号館を占拠、ただちに泊り込む。全ての日大生の限らない怒りと憎しみをこめて、固い、それこそ学生運動史上最強といわれる日大のバリケード第一号が構築された。

我々が決して忘れることのできない日、この日を「殺戮の六・一一」と言う。

この日は日大全共闘武装行動隊が事実上生まれだ日である。六月一日に法学部三号館を占拠してそれからの長い長いバリケードストライキ体制に入った日大闘争は、驚くべき早さをもって、闘争の発展と拡大を示していく。一二日午後二時、総経学部突入後直ちに強固なバリケードを構築・占拠、一五日文理スト権確立・スト突入、一八日

商学部スト突入・本館占拠、一九日芸術スト突入四号館占拠、そして二五日には要求した大衆団交への全学総決起集会が開かれ、またもや応じない古田理事会に対して抗議の大デモンストレーションを貫徹し、午後八時法学部一号館を完全封鎖した。

翌二六日には、全日大十一学部の闘争委員会が全学共闘会議の下に組織的に結集し、前日に分裂集会をもった六学部自治会や、この日に経済学部・法学部学生の参加を拒否し、独自に本部前で集会をもった教職員組合などの欺瞞的組織とは全く違った全日大唯一の闘う前衛組織たる日本大学全学共闘会議が組織的に確立した。続いて七月に入り、四日には経・商・短二部スト権を確立、七日には理工において二部自治会とボス交中の古田をつかまえて、大衆団交を前提とした予備折衝を確約し、八日理工スト突入、一六日には「学生集会を前提として予備折衝に應ずる」との文書を克ちとった。

七月一八日、本部会議室において、大衆団交を前提とした予備折衝を行なう。全共闘の行動隊約八〇〇、法学部一号館に結集。大学当局は、大森、鈴木両理事他一七名しか出席せず。古田会頭は依然、出てこない。全共闘は当局側を糾弾、その結果、①古田会頭が同席できなかった事に対して自己批判する。②全共闘を日大の真のかつ唯一の代表と認める。③七・二〇に大衆団交を前提とした予備折衝を設け、古田会頭以下全理事、各学部長を出席させる。等々を確約。

七月二〇日、再度の公開予備折衝、敵当局との



具体的な政治的対決という側面で、闘いは新たな局面を迎えた。この日、古田会頭以下理事一三名全共闘側六〇名が出席し、本部四階で、公開の折衝。古田会頭の破廉恥な開きなおりで、議事は延々として続いたが、八月四日大衆団交開催の旨を約束させ、更に三回にわたり新聞広告を掲載すること等を確約、公文書交換を行なう。この後、総括集会を開き、各学部毎に予備折衝勝利の勝ちどきをあげて、三崎町をデモ行進した。

二四日、古田会頭より、大衆団交を無期延期する旨の申し入れ書が来て、古田理事会の欺瞞性が全学友の前に徹底的に暴露され、八月一日には最終的に大衆団交無期延期の通告文書が来た。八月二日、四日には古田のあまりの裏切り行為に対して、全学抗議集会が開かれた。

この様に、この時期は、正に怒濤の進撃の時期であった。そして闘いの内実化の面でも、文理学部の例をあげれば、連日のカンパ活動、自主カリキュラム編成実行委員会の設置と自主講座、映画会の実施、情宣活動では文闘委機関誌、「変革のパトス」の発刊、七月七日の七夕総決起集会とバリケードファイヤー、そして六学部自治会、久米執行部の分裂策動に対する明確な批判等、数々の組織活動が行なわれた。

このような、全学共闘会議の正義の闘いの全面的な攻勢に対して、大学当局古田理事会は更なる反革命的攻撃を全学共闘会議に対して、また各学部闘争委員会に対し、そして、闘う学友の一人一人に対して行なった。それは政治的攻撃、軍事的攻撃、更にこの時期から加わったところの国家権

力・機動隊を使つての攻撃と多彩なものがあり、大学当局には、依然として居座りを続ける姿勢が、ありありとみられた。

学生戦線に対する政治的攻撃としては、まず各学部当局が、バリケードスト突入以前に行なった休講と言う名目で、学生を学園から追い出しにかかった事、また例年よりも一〇日も早く夏休みにし、学生の帰省を促し、学生戦線の分断を目論んだ夏休み策動、「朝日ジャーナル」の記者を装って入り込んだスパイ(付属高校教師)の問題、法学部では、「法学部速報」というビラがまかれ、占拠中の校舎から、疫病発生デマ宣伝が流布された。

更に六月二十五日には、当局の新たな策動である一九項目改善案なるものがだされ。全共闘の分裂を策動したが、この一九項目が如何に欺瞞的なものであるかを闘う学友の一人一人がするどく見抜き、全共闘の要求項目とは、まったく質の違ったものであることを確認し批判しあった。

さらに古田理事会の最も大きな裏切り行為として位置づけられるのが八・四大衆団交の無期延期であったが、この行為も古田理事会の徹底した欺瞞性を暴露しただけであり、夏休み策動粉碎、バリケード体制貫徹の固い決意を学友の多くにさせただけだった。

当局の軍事的攻撃としては、まず六・一一の暴虐、そして六月一九日未明、文理学部バリケードに対して行なわれた学生会議完全武装暴力部隊による襲撃(文闘委行動隊によって完全に粉碎され一名捕虜)等であるが、個人的なテロ行為は数が

つきなかった。カンパをやっていた学友に対するテロ、経済学部戸部君に対するテロ等紙数にあまりある。

さてこの時期に新しく出てきた機動隊を使つての学生戦線に対する攻撃であるが、これは国家権力と大学当局との癒着を意味している。

六月一日、あの右翼暴力団の暴虐の中で、国家権力機動隊は、それを傍観するばかりか、怒りの声を発する学友に対して殴る蹴るの暴行を働き、なかならず抗議した学友を逮捕したのである。

続いて七月二〇日、予備接衝の後、デモの隊列に機動隊約五〇〇名が突然襲いかかり、二一名の学友を逮捕、数十名に重軽傷を負わせた。さらに二一日早朝、機動隊の弾圧に抗議すべく、学友は神田署に怒りのデモをかけたが、神田署に配置された機動隊にまたもや弾圧され、六五名がさらに逮捕された。

そして八月二日、四日の全学総決起集会にも機動隊の弾圧があった。これらの国家権力機動隊の弾圧行為は、素朴な日大生がもっていた警察権力への幻想を全面的に打ち破り、やがてくる権力との全面対決に対する決意と思想性を作り上げていったと言えるのではないだろうか。このようなあらゆる大弾圧の中で、日大全共闘は鍛えられ、内実化されて夏休み闘争への力を蓄え、そして更なる闘いを革命的に展開していくのである。まさにこの時期は日大全共闘が、大学当局と全面的に対峙して、激烈な実力闘争を展開する中で、自らの内実化を深めていったと言つてよい。



間奏曲「I」(八月五日・九月三日)

43・8・12

文理教授会との一三時間にわたる大衆団交。森脇教授の辞任を確約。要求を全面的に勝ち取る。

各学部総決起集会。

25 23

全学総決起集会(法一号館)開催。集会後のデモで学友八名不当逮捕される。商バリエードにスト破り来襲。正面バリエード破壊される。

9・3

全共闘、日大病院駐車場で古田会頭に会い、大衆団交について折衝を要求するが拒否される。抗議する学友の座り込みに対し、機動隊がゴボウ抜き、三名の学友が検挙される。

△解説▽

この時期は大学当局からかけられてくる弾圧も表面化する事もなく、各学部闘争委員会も、報告集会、討論集会などと共に軍事的な活動よりも、自己の理論強化等に個人個人が力を入れる時期といえた。文理学部の例をとれば、八月七日、文理教授会とボス交中の久米執行部は学友に批判され、文理学部のバリエード内で大衆団交のすえ、自己批判し、解散を声明した。また、八月一二日には教授会との大衆団交が行なわれた。炊き出しのおにぎりともそ汁などが教授達にくばられ、森脇指導委員長の自己批判の問題、そして文理学部闘争委員会を文理学部に於ける正式な代表とする事などが追求された。一四日には「バリエード武装スト六〇日貫徹報告集会」が開かれ、中間総括

が発表され、討論の後、映画「安保闘争の記録」「鉄路の闘い」が上映された。そして二三日には各学部総決起集会、二五日には夏休み最後の、そして新たな闘いに向けての全学総決起集会が開かれた。

大学当局の弾圧としては、散発的なテロ(八月一七日の深夜、文理学部バリエードに四人組のなぐり込みがあり、正門警備の学友がビールビンで頭を殴られ、八センチ切る重傷を負う)

八月二五日、全学総決起集会に商闘委が参加している間をぬって、商学部は三時頃、三〇余名の右翼暴力団が車で乱入、正門のバリエードを引きおし、本館、一号館を荒した。

九月三日、日大病院横の駐車場で古田会頭をとらえ、大衆団交拒否についての自己批判とその実現を要求したが、突如現われた機動隊の弾圧により完遂できず学友三名が検挙される。この事件は、翌日から起る日大闘争の中でも、最も激烈な闘いがくまれた数日間につながるものであった。

この一ヵ月間は、初めての夏休みにおけるバリエードスト体制の完全徹貫の時期で、とりわけ大きな動きはみられなかったが、これ以後の更に激化した闘いの基盤となり、原動力になった意味で非常に重要であった。

暑く長い夏を帰省もせずにバリエードに泊り込んで闘い抜いた学友が、ほとんど今、最も先進的な活動家として闘っていることをみても、この夏休み闘争の意義がわかるのである。

高揚(九月四日・九月三〇日)

43・9・4

仮処分申請の強制執行で、経・法・本部のバリエードが機動隊によって破壊される。一三二名の学友逮捕。全共闘のスト破壊抗議集会(理工九号建設予定地)に二、〇〇〇名の学友結集、集会後、経・法を再占拠、バリエード再構築。

5

早朝、機動隊再度バリエード破壊。全学抗議集会、五、〇〇〇名の学友結集、神田をデモ。経・法を再占拠。バリエード構築。経済校舎前で集会を開く、七、〇〇〇名の学友参加。生産工学部スト突入。

6

経済前座り込み抗議集会後、法・経四度目の占拠、バリエード構築。五〇〇〇名の学友白山通りをフランスデモ、機動隊は催涙弾、ガス銃、ガス筒で弾圧、三五名を検束。

7

理工空地で全学総決起集会、約三、〇〇〇名の学友が結集して神田デモ一二九名検束。

9

郡山工学部、本館につづき図書館封鎖。

10

法学部長以下五名辞任、理事会は四項目の譲歩案決定。商学部へ体連系の暴力学生が来襲。文理、教授・助教授・講師の合同会議、一五九名の署名で声明書を理事会へ提出。



12

理工空地で全学総決起集会、七、〇〇名結集、白山通りデモ。機動隊の弾圧で学友二名負傷。

14

商学部へ鉄棒をもった右翼暴力学生の来襲。

17

九学部教員の連絡協議会発足、約八〇〇名、理事総辞職を求める声明を發表。

19

全学総決起集会、五項目の要求に二一日午後八時までの回答を要求。医学部スト決定、一一全学部のストに発展。

21

定款改正後に全理事退陣の意向が發表される。これに対し全共闘は二四日の大衆団交を要求。

30

午後一時、全共闘経済前総決起集会一方両国講堂では日大学生有志会の決起集会、午後三時より両国講堂で初めての大衆団交開かれる。

生産工学部へバリケード破り来襲。

芸術学部にも武装した暴力学生が来襲、女子学生二名を針金でしばり、寝具等を焼く。

△解説▽正に高揚の時期であった。九月四日「占有排除仮処分」の執行による機動隊の導入は法学部、経済学部において徹底抗戦と言う対決の方法によってむかえられ、この時から一二日までの激動の一〇日間へとうち続き、さらには九・三〇大衆団交へと、二四日に行なわれた本部封鎖等を含みつつ、怒濤のような大進撃を続けたのである。

この九月闘争の意義がいかに大きなものか、それは語らずともわかるはずである。

日大闘争が全国の人民の全てに知らされたのはこの時である。そして日大全共闘は永遠に不滅であると云うことを全ての人々が確認したのもこの時であり、さらに秋田明大と言う人物が日本の学生運動の中における一人の英雄として誕生したのもこの時ではないか。

夏休み明けの攻撃はまず大学当局・古田反動理事会の方からしかけられた。しかしながら、法・経済両学部の学友の徹底抗戦と言う、まさに革命的な闘いがうみ出したものは、学園を一方的に国家権力に売り渡し、この日大闘争を暴力的に圧殺し収束させる事を考えている古田理事会に対する怒りと、法・経部の学友の闘いに呼応したところの万余の学友の闘う姿勢である。四日午後二時に始まり五日・六日・七日、そして再度の永久占拠を目ざして一二日へと続いた法・経奪還闘争は、必然的にそれを阻止し、弾圧しようとしているところの国家権力機動隊との全面対決を生みだし、莫大な数の逮捕者を出したが、日本大学全学共闘会議は、そのうすよごれた権力の手先を万余の闘う学生の団結した隊列によって完全に打ち破ったのである。

日大闘争は、単なる学園民主化闘争から日大革命の闘争へと移り、闘う全ての学友が日本大学の根底的解体を考えるようになった。古田理事会は全共闘の猛反撃に対して二一日、要求を認める形式をとりつつ、日大の「近代化」すなわち昭和三年の「日大改善案を最終的に貫徹する方針と近

代的な学生支配・帝国主義的学生支配」を目的とする回答書を示してきた。全共闘はその欺瞞性を抗議し、大衆団交を要求したが、二四日、古田は姿を見せず、結集した学友は本部封鎖を宣言し、三〇日に全理事に大衆団交に出席することを要求した。

九月三〇日、全共闘が法学部一号館で大衆団交を開くよう要求したのに対して、古田理事会は、日新会古田が六、〇〇〇万円の金を出してつくらせた右翼学生グループの要求があるとして、三時から両国講堂で「全学集会」を開きたいと申し入れてきた。全共闘は、公然たる分断工作に反撃すべく多くの学友に方針を情宣し、右翼暴力団を放逐するため、二時に、工作隊三〇〇名を講堂に派遣した。これに先立ち右翼学生グループ二〇〇名は、バリケード撤去をスローガンに集会を開いていたが、工作隊を中心とする学友の追及に逃げだし、三時には、全共闘に結集する二万余の学友がつめかけ、団交拒否抗議集会が開かれた。「古田は大衆団交に出てこい」の声は両国講堂をゆり動かし、全共闘の断固たる決意の前に、三時三〇分、古田会頭をはじめ、理事、学部長二〇名が姿を見せた。全共闘は抗議集会を続行し、度重なる弾圧と分断の工作に抗議した。その結果、全共闘主催の大衆団交を始めることを双方で確認して、大衆団交に入った。

スト突入後、一一三日目にして古田理事会は一〇万学生の前にはじめて姿を現わし、自己批判——自治権の確立についての諸政策を確約したがこの間にも芸術学部が右翼暴力団によって襲われ



る等、この大衆団交が日大闘争の終局では決してない事を語りつつ、史上初と云われる大衆団交は一応の所、学生戦線の圧倒的勝利の裡に、一〇月三日に再度の団交を確約し、翌日午前三時に終った。この大衆団交に対しては、諸々の批評があるが、この団交が数々の問題を含み、また多くの問題提起をした事だけでも決して小さな問題ではない。そしてそれは、それ以後の質的にまったく新しい日大闘争の序幕であったのである。

### 第三期 政治闘争へ

発展・その一「一〇月一日～一月七日」

10・1

政府閣僚懇談会における佐藤発言は九・三〇大衆団交を『日大方式』として非難、国家権力の恐怖は、日大闘争への全面的政治的介入となって表われた。

3

古田理事会はまた大衆団交を拒否。当局の限らない犯罪性を暴露した。全共闘は、一万人の学友と共に、九項目の実質化まで、バリケード体制を堅持することを確認した。

5

秋田議長以下八名に、逮捕令状発令九・四以降の無届けデモ等による、都公安条例違反、公務執行妨害等。

9

全学総決起集会（逮捕令状粉碎・古田理事会への最後の鉄槌を）。令状逮捕に最大の怒りをぶつけて、三〇

14

〇〇名の学友が全共闘の旗を先頭に壮絶なデモ、再び、三崎町を解放区とする。

郡山工学部で右翼ゲバルト部隊の襲撃とバリケード放火事件起る、木刀、コン棒、空気銃等の凶器の攻撃に対し、工闘委は実力で彼らを粉碎し、追い帰した。

一〇・一四焼打ち事件の事実経過  
一四日午前三時に二五〇名位の右翼体育会系暴力学生がバリケードを破りに来るといふ確実な情報が入り九時に会議室に集合し、警備の配置等を確認し直ちに配置につく（警備人六〇余名）

午前一時、工学部周辺に車の往来が激しく、見張りらしき者でわれわれの様子をうかがっていた。

午前二時、体育会系暴力学生前応援団副団長、前合気道部幹部他八名正門の方から、われわれのつくった障害物（右翼がダンプで乗りつけるとの情報が入ったので、道路標識を横倒し道路を封いだ）を取りはずしながら、管理棟前まで歩いてきて二手に別れ、一隊は芝生（図書館前）に座りこみ、他の一隊は管理棟前の歩道に立って「降りてこい」「お前等学生か」とか、わけのわからぬことをどなり挑発する。図書館前に座

っていた暴力学生も加わり、われわれを挑発しようとする。そして、歩道から退き投石する。投石の間四、五分。

その間、二人の暴力学生（内合気道部前幹部）は図書館に立てかけてあった「封鎖」と書いてある立看板をこわす。そして逃げて行く。管理棟に来てからの時間三〇分余り、一〇名の学生逃げるようにして正門から消える。その時正門を開いてゆく。正門の方ではガラスをこわす音がする。

発煙筒をたく、二時頃、旧実験棟東側に二から三人人影を発見。ヘルメットと角材を持った人影が付近の街灯を消しながら数十名の暴力学生が除々に集まってくる。

三時少し前、暴力学生は何かしら自動車のヘッドライトで合図を送っていた。また学校側の話しによると学部長、学監等は二時頃電話を受けて学校へ来ていた。

午前二時四五分、教員七名が数分間管理棟前で何事か話していた。正門の外側で約三〇人の暴力学生を発見。その時暴力学生は門を閉める。六人の教員、正門の方に行き帰ってくる。

午前三時、管理棟正面の前に黒へ



ルメット、角材の学生をサーチライトで発見。

午前三時五分、笛の合図でいっせいに投石開始と同時に切電され真暗となる。新旧実験棟にいた暴力学生約六〇名は一号館侵入を計る。われわれ工闘委は照明弾的なものを投げたところ暴力学生の足がとどまった。そして暴力学生は投石をはじめ。サイドから暴力学生はまわり東側入口から一号館に再び一〇名入る。工闘委は、これ以上一号館に入るのを防ぐために照明弾的なもので応戦しとめる。

午前三時二〇分、図書館屋上からの投石にあう（一号館および管理棟屋上）、図書館屋上の暴力学生は二〇名位、その後ビン、パチンコ玉等が一号館および管理棟屋上めがけて雨のように投げてきた。そのため、われわれ学友は図書館屋上から飛んできた石が顔面にあたり鼻から出血。またほかの学友は首に二つのにぎりこぶし大くらいの石あたり、負傷しながら防戦、二時間あまり、しかし下半身がまひし動かなくなる。

午前三時四〇分、一号館東口バリケードを壊し、さらに屋上の東側バリケードを中から壊しはじめる。

一方管理棟正面においては投石し

はじめて、すぐに電気を消され、学園はやみと化した。投石は、だいたいい一線上に並んだ二〇名くらいの暴力学生によって行なわれた、教職員は右翼暴力学生に対して側方から一〇メートルほど離れて大声で「やめろ！ やめろ！」というようなことを叫びながら止めようとする。その間は数分間であった。ベランダからはやみと化した学園で投石する暴力学生に応戦のため照明弾的なものを投げる。

午前三時一五分、ビニール張りの畳を十数枚体育館の方から運んでくるのを発見、その間も二〇名以上の学生は激しく投石、畳を運んできた者は、一線にそれを縦に並べて管理棟に近づこうとする。その一部は図書館の封鎖を破り屋上にあがる。ベランダからは照明弾的なものを数本正面に投げると、一線上に並んだ畳は一時過ぎ、またじわじわと近づこうとする。と同時に図書館屋上、木の影から援助するように投石が全館に激しく強くあたる。報道関係の照明は逆に利用され、狙いうちにされた。またある時には報道関係が要請し投石などを写すような全くハレンチな場面も見受けられた。この同じ場所には教職員は見えず、また、

図書館の屋上から空気銃の玉らしきものが風をきって耳のそばを通る。

暴力学生は一本の火炎びんをベランダめがけて投げる。これが二階の窓辺で発火、炎上、工闘委はそれを消火器で消す。工闘委は応戦のため、照明弾的なものを投げる。それらのほとんどは畳の前に落るがなかなかうまくいかない。近づこうとする暴力学生は畳をたてとして一歩退き、二歩前進してくる。まことによく訓練されている（このような照明弾的なものを投げ、畳をたてにしてしりぞくというようなことを六、七回彼らは繰り返す）この間、図書館の屋上より、人間の手（腕力）ではとても考えられそうもない速さの投石がべらんだ等にめがけて雨のように飛んでくる（コンクリート等にあたりと火花がパチパチと出る）工闘委は照明弾的なものをもって応戦すると彼らは畳で前と同様のことを繰り返す。

午前三時四〇分、一階東側管理棟通路では、畳に四、五名で放火したと思われる暴力学生が運び一枚目の畳にガソリンをかけて火を放ち、その火にもう一枚の畳を重ねた。火の畳からは白い煙がたち上る。そして畳の間から赤い炎が断続的に吹き出



していた。火の畳は一度火が消えるが、しかし内側は赤く、くすぶっていた。その中に白いズボンと白いジャンパーで赤いマスクをした暴力学生を目撃、その時図書館と一号館の前の掲示場の下に先生（背広にハットをかぶった）らしき人が指しているのを目撃、こちらからみると、指揮しているように思われた。その間も人間の腕力では考えられない速さの石が絶え間なく雨のように続く。

一方一階においては、東口のドアのところを木製のイスを利用して、ほとんどスキ間のないようなもので、その後教壇四個と机、ゲタ箱で、バリケードが築いてあった。その机、イス等普通のものより固い木であり少しの火力では直ぐには燃えないようなものであった。東口のバリケードの幅は約二メートル。午前三時五分頃、ドアのバリケードの外側は赤く放火されたため、消火器のホース先をバリケードのスキ間から外側に向けて出して消火粉末を噴射したが、火は完全には消えなかった。再度他の工闘委の学友が手まで出してホースを真下にむけて噴出し消火した（この時使用した消火器一二数本）

しかし、また暴力学生はガソリン

らしきものをかける。工闘委の学友が消すというようなことが四、五回繰り返された。

その間に煙は一階を充満した。また、そのようなことを繰返しているうちに完全に消火器は使いはたした。そして消火器のホースを引いたが電気が通じないため、ポンプが動かず消火にあたれなかった。もし電気がついていたらならば完全な消火はできたであろうと仮定する。見える炎はたいしたことはなかったが煙に完全にまわり、呼吸も困難になり、やむなく一階を退く。また、一階西側入口にも五、六回の放火が連続的に行なわれたが、こちらは失敗したらしい。また、屋上においては屋上に出てきた暴力学生は机をタテに三〇人くらい投石をはじめた。工闘委の学友は、それに対して照明弾的なものを投げつける。それに対して彼等は火炎ビンで攻撃してきた。一号館屋上の西側のバリケードに火炎ビンが着火、そこに研究室から持ち出したと思われる紙を燃やしはじめた。そこで工闘委は、投石もかえりみず消火器で消火に務める。また一号館屋上から暴力学生によって投げられた五六本の火炎ビンの内一本が、イスで築いたタテに燃え移る。

工闘委がこれの消火に務める数本が管理棟屋上で燃える。管理棟、東側にいた工闘委はほとんど終始投石はしなかった。

ベランダや、その下のバリケード等に数本の火炎ビン、ガソリンを浸した桜の木等が投げ込まれたが、工闘委はそれらのものをことごとく消す。

午前四時三〇分一階は火がまわり消火器も使えない状態の管理棟は、われわれの手ではどうしようもなく完全に消火不可能になっていた。畳を持っていた暴力学生はこのような状態となっていた時、畳と共に森の中に退いた。われわれは投石等を全面に中止し、火のまわりを最少限にくい止めるため電気をつけ、消火できるように要請するが、暴力学生はまだ投石したり教職員と同様ぼう然と見ているのみ、われわれ工闘委は内線しか通じないため、寮の方に知らせて消防署の方に連絡するよう要請する。この時電話（内線）を交換室で妨害する者あり。（午前四時四五分）

午前五時、三階も呼吸困難となり全員屋上に退去する。

午前五時一五分、ベランダに最後まで頑張っていた工闘委の学友も消



火のため、ベランダからおりる。そして数人暴力にあうが、幸い軽傷で済み避けることができた。

午前五時二五分、消防車、正門より入ってくる。工闘委とともに消火に協力する。

午前六時過ぎ、火は完全に鎮火する屋上に上った工闘委学友も人数を確認し、一号館屋上に移り全員無事脱出。

午前七時、消火に務めた工闘委は全員図書館二階に結集し総括を行なう。

歯学部闘争委員会、学歯団交を開催。全学共闘会議は、歯学部独自の方針に対して学部団交に介入し、流会させた。

全共闘組織部長今章君が都公安条例違反で不当逮捕される。今君の不当逮捕に対し、抗議デモに決起した法経・理工の学友にも官憲は弾圧を加え、一四名を不当に逮捕した。

古田会頭、居直り表明。「寄附行為が改正されるまで退陣しない。」

## △解説▽

現在においても、日大闘争は九・三〇以前そして九・三〇以降として区別されている。九・三〇大衆団交が、様々の問題を含みつつも、数多くの問題提起をしたと言う事は、これ以後の闘いに如実に現われてくる。

一〇月一日、前日からこの日にかけて行なわれた大衆団交人民裁判（日大方式）と言う形で表われた「支配者に対する人民の怒り」に恐怖した佐藤ブルジョワ政治委員会は、政府閣僚懇談会を開き、九・三〇大衆団交を日大方式として非難、佐藤栄作は、日大闘争を政治的、社会的問題として提起してきたのだ。

もともと日大闘争は、その質の点から見ても、単なる個別学園内改良闘争として終るはずはないものだったが、ブルジョワジーが、あまりに恐怖し、あわてふためいて、彼等の側からこの日大闘争を政治闘争として提起してきたことは、こっけいである。

闘う全ての学友は、日大闘争において、闘う者一人一人が、はっきりとした政治的観点を持たなければならぬと言うことを、再度確認した。そしてこの日から、古田理事会は我々の前面からしりぞき、国家権力が、そう、その手先である機動隊ではなしに、佐藤ブルジョワ政治委員会そのものが、我々の前面に立ちふさがったのである。この日から国家権力は日大闘争への全面的政治介入日大闘争圧殺が始まり、日大闘争は、これまでの日大闘争、いや日大だけではなしに、これまで全国で闘われてきた学園闘争とは違った、学園闘争としては、他の大学の到達することのできなかった、全く新しい段階に入る。

政府ブルジョワジーの日大闘争への介入はまず一〇月三日に確約した、再度の大衆団交の破棄という形で現われ、学友はこの日のデモで自然発生的に「サトウ・タオセ」のかけごえを口にする。

全学共闘会議は、一万の学友と共に、当局の限らない犯罪性を弾劾し、九項目の内実化を目指して、より一層のバリケードスト体制の堅持を確認する。

一〇月五日、国家権力は、秋田議長以下八名に逮捕令状の発令と言う形で、日大闘争圧殺の手を更にのばす。

そして一〇月一四日郡山工学部のバリケードが完全武装の右翼暴力集団によって、襲撃されるが、工闘委は実力をもって、彼等を粉砕する。

また一〇月三十一日には古田理事会は政府ブルジョワジーの日大闘争圧殺に呼応して、最後の居直りを表明し、「寄附行為が改正されるまで、退陣しない」と記者団に発言する。

この時期における全学共闘会議の闘いについて更にいえる事は、日大闘争が完全なる政治闘争となりて、権力の弾圧が露骨になっ、来たのに対して、学友の多くが街頭政治闘争へと自らの思想性をもって、参加していったことである。

まず、一〇月五日と一〇月一六日に行なわれた。闘う他大学全共闘との連帯集会、そして一〇月八日、二〇日、二一日にかけての新宿闘争、更には、一月七日に行なわれた首相官邸に対する攻撃など、この間、山崎君追悼、国際反戦デーと特に多かった全学連の統一行動に、日大闘争を闘っている学友の多くが参加していった事は、非常に意味のある事である。

なぜ学友がこれほど政治的観点にめざめ、街頭闘争に積極的に参加するようになったのか。考えてみれば、まず第一には、やはり一〇月一日にお



ける佐藤発言と、そして一〇月三日にみられた古田の度重なる裏切り行為に対する全ての学友の怒りが、古田打倒から佐藤政権への憎しみ、そして佐藤政府打倒、さらには現在の自民党政権に対する根本的な敵対意識へと発展した事、第二には九月四日から二月までの「激動の一〇間」に行なわれたところの機動隊との全面対決、街頭闘争によってつちかわれたところの、街頭闘争への自信そして機動隊へのはなはだ観念的ではあるが、強烈な憎悪があり、第三には、夏休みの地道な闘いのなかで、学友一人一人につちかわれたところの自らの内実化、思想性の確立、あの暑く長かった八月闘争を闘いぬいた闘争の精神等が言えるのではないか。

以上の三つの観点が、結合されて、日大生の政治闘争への参加という事が、実現されたのではないか。

このような一〇月闘争の間にも、学生戦線の内部では九・三〇大衆団交において確約した九項目の要求の確約書を、単なる確約書として終らせることなく、その内実化をはかる為に、文理学部では、一〇月二五日に学生大会が開かれ、そこで九項目要求の貫徹の為にバリエードスト体制の強化が確認され、三つの設立委員会が発足した。すなわち、それが自治会規約設立委員会、学館設立委員会、生協設立委員会の三つであり、その他にはこれまでの自主講座が、新たにフリーダム・ユニオンに発展し、発足するなど、内実化の為の活動が目立った。

尚、一〇月一四日に見られた郡山における右翼

の襲撃の詳しい真相を明らかにしておく。

### 右翼襲撃総括

一〇・一四の事件は東京からも右翼の支援学生も、もちろん多数来ていたし、当日、狂人のようにあの光景を見、指揮していたのが広川工学部長以下数名の教職員であったことは疑いもないことであり、立証されている。

しかし、派遣されて、まず驚いたことは、管理棟（文理の本館と同じ）は、一、二階は壁等が無残にも焼けただれ、戦いのものすごかったことを「不気味」にも物語っていた。そして窓というあらゆる窓は、直径五、六センチの穴がポツカリと丸くあき、外側の窓を打ち破り、内側の窓までぶちぬき、見事に割れていた。人間の腕力ではどうも考えられないことがただただだけでも想像できよう。これは工闘委の学友諸君の実験でも立証されている。

暗くてはつきり確認することはできなかったが恐らく強力な投石機を使って、ばんばん飛ばしたのではないかと考えられる。大学当局は土地の某建設等の土建業者と結託していることは疑いもないことである。横井学監が密接な関係であることもうわさされている。

工学部も、文理教授会で構成している刷新委員会みたいなものが野引新学部長のもとに助講会がブレインとなって陰險に学生の分裂策動をしている。

教授会も一見民主的なポーズをとり、いかにも学生と連帯して闘っているようなそぶりを見せ、

一方では話し合いなどをしようと穏健な態度を平気で装っている。しかし、他方では学生民主化促進委員会（小俣、星、遠藤、倉田、渡辺）や右翼暴力学生、一部体育系学生を留年問題、卒業延期問題を露骨に使い、四年生等の建築学科生を中心にスト反対派を動かしている。

野引新学部長は就任の際、記者会見の席上、進学も必ずさせる、授業の足りない分はレポート形式で補う、などと甘い言葉で、いかにも話のわかるような口ぶりであり、学部団交を近日中に開き、この問題に関して徹底的に話し合おうではないかと、のうのうと述べている。これはまさに近代化路線の実体化であり古田体制をより強固にする以外のなにものでもないし、全学共闘会議の分裂策動ではないか？ 古田法人理事会は今までにわれわれに対して攻撃してきた点が三つある。

第一点は、近代化路線の実体化、第二点は、全学共闘会議の闘う常備軍への大学当局の徹底的な暴力装置（右翼暴力学生など）での弾圧、第三点は、授業再開という、学生に対する留年・卒業延期問題の恫喝式合意（大学当局（学部当局）のイデオロギー攻撃以上の三点が露骨に運用され、徹底的に、今まさに貫徹されようとしている学部の一つではないかと思われる。

現に九月四日にスト突入以来、四年生は市内技能センターあるいはその他の某所で授業をはじめ四年生に対しては今学期中の授業は完全に終わったと当局は言明している。工学部の欠点は、学生がキャンパス内に集まらない点に若干問題があるが、寮生をいかに把握するかによって今後の問題



も変り、その組織化により強固に団結するのではないだろうか。二八〇名もの寮生を無駄に眠らせておくのは、一語で述べると宝のちぎされの様な気がする。その点提起しておきたい。最後にカンパニー・一一の郡山デモに関して述べたい。駅前のカンパについて、PM三・〇〇〜六・〇〇まで毎日行っているのだが、駅長・助役・公安が出てきて、客に迷惑であるから中止する様にそれでも駄目だとわかると、彼等は私服・制服警官を呼び、われわれに恫喝を加え、排除してくる。最後の手段は機動隊を一個中隊呼び、実力で完全に排除してくる。

これは明らかに公安当局国鉄当局・大学当局が密接な関係を保ち、われわれを露骨に弾圧しているものであるという点を、再度確認しなければならぬ。一一・一一全共闘は福島県(郡山市内)始って以来の無届け(非合法)デモを六〇数名の学友とともに貫徹したのであるが、当日の夕方、県警本部長及び郡山警察署長は至急に記者会見し、一人も逮捕できなかった点について、県民、市民に遺憾であり深く謝罪すると、テレビ、ラジオあるいは新聞を使って述べている。そして、われわれをヤクザ以下に扱い、学生暴徒とののしっている。また県警機動隊、郡山、警察署員総出でわれわれのデモを片側規制し、弾圧してきたのである。そして多くの学友に対して、県公安条例違反道路交通法違反というニセの罪状で全国的な指名手配を出し今だに逮捕しようと言きになっていることをここに最後に訴えておきたい。

郡山の学友諸君に対して一言述べておきたい。

学内に官憲が導入されたり政府が闘争に介入してくることはもう政治的な問題である。もう少し色々な点について注意深く真剣に考えて組織化、理論化強固なる思想性のもとに、精神的なバリケードも自分自身の中に再度構築して、われわれのため、目的のためにスライキを貫徹してもらいたいと考えます。

#### 発展・その二(一一月八日〜一二月三日)

11・8

右翼ゲバルト部隊四〇〇余名、江古田・芸術学部大襲撃事件起る。この日未明、「関東軍」と称する(日大、拓大、東海大の応援団、体育会「星道会」、ヤクザ)右翼暴力集団は、灰色の制服に、スチールパルプ、角材、鉄製タテ、木刀、鉄製クマデ、ジャックナイフ等の想像を絶する完全武装で、バリケードスト破壊を企てて来た。芸闘委の必死の攻防(芸闘委は三階にまで追いつめられる)は二時間にも及び、急ぎ結集した三〇〇名の全共闘と共に完全に粉砕した。午後二時、「一〇日父兄会等々に対する方針提起」全学総決起集会、四、〇〇〇名、午後五時、経済学部三崎祭開催パレード。テーマ「紀元〇年の季節」。学生運動史上、初のバリケードの中の大学祭として盛大に行なわれた。

12

芸術学部機動隊導入。八日の右翼

13

バリケード破壊の現場検証という名目で学校当局と結託し、八〇〇発以上の催涙弾(新型のP型ガス弾)の大弾圧が連続三時間にわたり、徹底抗戦にもかかわらず、芸闘委四六名は全員逮捕された。

14

経済二年闘争委員長横濱頼光君、傷害暴力行為容疑で逮捕される。

17

両国講堂において、法学部デッチあげ学生大会が開かれようとした。これを暴露する為、両国駅に降りた法闘委の学生に機動隊が襲いかかり、全共闘副議長矢崎君、風間君、行動隊長稲辺君等十数名を不当逮捕し、錦糸町までサンドイッチ規制した。全共闘法闘委の委員長酒井杏郎君、長野県父兄大会の帰りに逮捕される。容疑は都公安条例違反。

18

経闘委二年富樫君、逮捕される。容疑は横浜君同様、傷害、暴力行為。法一館で全学総決起集会。日大闘争の革命性を全国に拡大する意義の下に、「一一、二二日大東大闘争勝利・全国学生総決起集会」が提起される。経商短二部闘争委員長樺山君が逮捕される。

19

東大安田講堂前で、「日大東大闘争勝利・全国学生総決起集会」が克ち取られる。日大全共闘に結集した五、〇〇〇名の学友は、機動隊五、

22

逮捕される。



〇〇〇名の大包围にもかかわらず、安田講堂前の集会を圧倒的に克ち取り、全国学生総動員の中で、革命的日大闘争の偉大な前進を切りひらいた。

24 経済学部四年生に対する授業再開、塩原（栃木県）、千葉等々で寺小屋式疎開授業が、当局の分断策動として行なわれた。法学部三号館裏に於いて火事発生。官憲当局は、放火の疑いで捜査始める。経済学部九・四に於いてデッチあげ殺人、傷害容疑で、米丸、八木吉田、沢田、佐村君を逮捕。郡山五名、暴行、傷害、軟禁容疑で逮捕状出る。

28 農獣医二年鈴木君逮捕される。暴行傷害容疑。

29 法闘争委員長酒井杏郎君別件再逮捕される。

30 大衆団交（理事者は出席せず、抗議集会に変える）

12・1 農獣医の笠置君、郡山工学部の神田君逮捕される。暴行、傷害容疑。

3 法学部高橋君、傷害容疑で逮捕される。

4 経済学部短大、軽井沢に於いて授業再開。しかし、参加した学生が授業ボイコットを決議して中止。芸術学部闘争委員長真竹君、法闘委三年紫田君逮捕される。

古田理事会の策動による評議員会は、五一名出席中、反対三名で「寄附行為」を可決した。

7 早朝、右翼と官憲が、郡山（工学部）へバリケード破壊にくる。工闘委によって粉碎される。

8 法学部一号館にて、全学総決起集会、三、〇〇〇名結集、当局の寄附行為弾劾及び一二・一五日大闘争報告集会が提起された。

10 古田会頭、寄附行為の件に関して記者会見。全理事は一二月六日付をもってやめる。しかし、新理事が選出されるまで職務は遂行する、と退陣引き延しを計る。

11 右翼学生一三〇名、清水谷公園にて集会、全共闘批判を行ない、日比谷までデモ。

15 東大安田講堂にて日大闘争報告集会が開かれる。

16 文理学部では、グラウンドで教授会が学部集会を提起。文闘委はこれを粉碎して、大講堂で弾劾集会を開き、その場に呼び自己批判を要求、夜一時、文闘委は教授会と訣別、すべての学友に教授に対する幻想を捨てさせる。

23 六八年最後の全学総決起集会。この日郡山では、またも右翼の襲撃をうける。

△解説▽  
前段階十月闘争の中で、日大闘争は全国学園闘争、そして現在日本中で闘われている学生運動総体に対し、数々の問題提起をして、闘いの新局面を切り開いて来たが、この時期はそれが更に深化し、日大闘争が一九六八年に於けるスチューデント・パワーをより動かす闘いとして、発展していった段階と言えようか。

二月八日未明、芸術学部バリケードに、突如関東軍とななる完全武装の右翼暴力集団が攻撃をしかけてきた。

彼等の正確な人数はわからないが、四〇〇名から五〇〇名の圧倒的軍事物理力をもって、バリケードを死守する為に革命的に闘った芸闘委の数十名の先進的学友を三階までおいあげた。しかし、芸闘委の学友は、急遽かけつけた全共闘の三〇〇名の武装行動隊と共に関東軍を完全に粉碎しつづいた。このバリケード破壊は、その規模の点から見ても、戦闘の激烈さから見ても、これまでに見られなかったスケールで行われたが、全共闘武装行動隊の自らの思想性をかけたバリケード防衛の闘いは、彼等を完膚なきまでに粉碎し、日大全共闘の底知れぬ実力を、全学友の前に示した。日大全共闘は不滅であると言う事を全人民に再度確認させた革命的闘いであった。

尚、この日芸術学部バリケードを襲撃した関東軍と名のる右翼暴力集団は、日大、拓大、東海大の応援団体育会などから選びぬかれた部隊で、関東軍のネーム入りの制服に、スチールパイプ、角材、鉄製のタテ、木刀、鉄製のクマ手、さらには



ジャックナイフ等の言語を絶する完全武装の部隊だった。

この日の午後、神田三崎町の法学部一号館で全学総決起集会が行なわれ、四、〇〇〇名の学友が結集し、早朝行なわれた大学当局による闘争破壊の武力攻勢に対して、断固とした弾劾をして、一〇日に行なわれる父兄大会等に対する方針提起をした。

午後一〇時、経済学部には三崎祭（テーマ「紀元〇年の季節」）の開催パレードが行なわれ、また文理学部においてはバリケード祭の前夜祭が開かれた。

共に学生運動史上始めてのバリケードの中の大学祭として、盛大に行なわれた。文理学部におけるバリケード祭は、「恐れるな！ 喪失するものはない！ 闘いの炎を燃やし続けよう」のテーマのもとで「闘いにとって祭とは何か」を追求、闘う学友が各学科で各サークルで数々の催しものを行なった。

バリケード祭は、八日の前夜祭に始まり、九日、一日と続き、一日の夜、キャンパスにはバリケード・ファイヤーが赤々と燃えるなかで後夜祭が行なわれ、その中で新たに開講されるフリーダム・ユニオンの開講式も行なわれ、盛大な雰囲気の中で三日にわたる闘う祭の幕が閉じられた。

このバリケード祭、そしてその後が始まるフリーダム・ユニオンは日大闘争の中で闘う学友諸君の手によって生み出されたものの典型と言ってよいのではないか。

さて、一月一〇日、大学当局はその軍事攻勢に対応した形での政治攻勢としての父兄大会を日本大学後援会を使って招集し、闘争破壊、全共闘破壊の分裂策動を計画し、右翼反動路線の貫徹を行なった。しかしながら一〇日、父兄大会の会場に乗り込んだ全学共闘会議の闘う同志一、〇〇〇名は、その正当性と理論性をもって後援会の右翼的、反動的策謀を暴露した。自らの犯罪性を暴露された後援会の幹部達は、多くの子供の大学を心配して集った父兄達を北海道、九州そして八丈島からまでも招集しながら一方的に流会を宣言した。彼らのあまりの無責任な態度は父兄達の反感をかい、そして闘う学友によって会場から放逐された。残った一般父兄達は、新たに自分達だけで父兄大会を開き、全学共闘会議の闘う学生と討論を行ない、今後は共に古田を倒す方向性をもって共闘していくことを確認した。ここで新しく結成された父兄会は、体制内的なものではあるが、居座りを続ける古田に対して敵対する組織として構成され、大学当局のこの日における政治的闘争破壊工作は、八日の軍事的な闘争破壊工作と同様、完全に粉碎された。

一月一二日、朝九時に芸術学部で機動隊が導入された。八日の右翼暴力団によるバリケード破壊の現場検証と言う名目であったが、これは国家権力そのものが大学当局と結託し我々の闘いを圧殺しようとしてバリケード破壊、ひいては闘争破壊を目論んだものである。今回の機動隊の攻撃は法学部経済学部の時よりもさらに激烈になり、八〇〇発以上の催涙弾（新型のP型ガス弾、これは

ベトナム戦争において米軍が使っているもので、佐世保で使われて社会問題となった）がバリケード内にうちこまれた。このような権力の大弾圧に対して芸闘委の先進的学友は、延々三時間におよぶ徹底抗戦で対応したが、四六名は全員逮捕された。しかしながら、芸闘委の先進的学友の徹底抗戦に呼応して、全学共闘会議は、同日の一時には芸術学部を奪還した。この奪還闘争は翌日も続いた。

日本大学全学共闘会議は、このようにこれまでの大学闘争のあらゆる歴史を塗りかえんばかりの国家権力と古田反動理事会の大弾圧を受けながらも、古田体制を根底から破壊しつつ、大学の自治を学生自治によって構築し、さらに帝国主義支配者と真向から全面対決する為、不屈の闘いを展開して来た。日本大学全学共闘会議は、このような闘いを全国の大学に波及させんが為に、日大闘争の革命性を、東大闘争との結合を媒介として、全国の大学に波及させ、密集した反革命を粉碎する中で、全国の学園闘争を勝利させんが為に、一月二二日、東大安田講堂前で「東大日大闘争勝利・全国学園闘争勝利・全国学生総決起大会」を勝ちとったのである。

日大闘争の革命性が東大闘争に結合するのを恐れた国家権力は、機動隊五、〇〇〇名を動員し、東大をとり囲む大包囲網戦術をとったが、我々の大部隊が、それを突破した。安田講堂前に結集した全国の戦闘的学友二万名の中を、日大全共闘に結集する五、〇〇〇名の日大生は、圧倒的拍手に



迎えられて到着し、日共民青は何ら手を出す事ができず、戦闘的学生の歴史的な大統一行動が実現されたのである。日大全共闘は一一・二二をバネに、十一月三〇日、九・三〇大衆団交の内実化を計るために、再び大衆団交を古田理事会に要求したのであるが、十一月三〇日、古田理事会は、大衆団交を拒否してきた。十一月三〇日の集会では、寄附行為の改正という欺瞞的手段によって、

大学当局が政治的に優位に立ち、ブルジョア的決着をつけようとするところの犯罪性をあますところなく暴露するとともに、大学当局の授業再開を粉碎し、反革命の嵐を打破しない限り、日大闘争の勝利はありえないのだ、ということをし、すなわち一二月闘争の困難な状況を勝利的に展開するための強固な意志確認が、大衆的に勝ちとられたのである。一一・三〇集会において、十二月一日に東大全共闘の配慮で、過去八〇年間、権力の牙城であった安田講堂でもって、日大闘争報告大集会を労働者市民学生参加のもとで行なうことを発表し、十二月一日、東大安田講堂における「日大闘争報告集会」は圧倒的な労働者学生市民の連帯を勝ち取り、あの広い安田講堂は闘う人民の熱気で満ちあふれた。

尚、ここで一点確認しておきたい点として、この時期（一一・八―一二・二三）と前の時期（一〇・一―一一・七）には、いずれも日大闘争が完全なる政治闘争として闘う学友に提起されていたが、我々の意識状況の問題としては前の時期には我々が街頭闘争に参加するとしても、単なる参加であったのに対して、今度の時期では、日大闘争

が、そしてそれを闘う学友の一人一人がより大きな政治課題をもち、自らの闘いを日本における激動の階級闘争の中に確固として位置づけ、その中から我々自身が政治闘争を作りあげて行ったといえよう。

この二つの時期における如実な例をあげれば、前期において日大全共闘が一〇月上旬のある深夜、東洋大にそのスト破壊を粉碎しに行った時、まだ我々自身の意識の中には「助っ人に行つてやる」という気持が多分にあった。しかしながら今期における一一・二二の「東大闘争・日大闘争・全国学園闘争勝利全国学生総決起大会」においては、もうそのような意識はなく、日大闘争を東大本郷キャンパスで、全国学園闘争を全国の闘う学友と共に闘うのだと言う意識に変革されていた。この事をもつてしても闘いの違いは完全に証明できる。これらの意識の変革も、日大闘争の質の発展と、そして我々自身の真剣な討論の中で勝ち取られたものであるといえよう。尚、この間の闘いにかかけられた国家権力の、そして大学当局の闘争破壊の策謀弾圧はここで述べたものほかに、数多くの学友に対する傷害容疑の逮捕令状の発令と逮捕状逮捕、とりわけ九・四で革命的に闘った経済学部の学友にかけられた、傷害致死容疑の再逮捕、さらには十一月一二日に徹底抗戦した芸文部の四六名全員にかけられ二四日拘置など、数多くの血まよった大弾圧があった。

そしてさらには、これら国家権力の弾圧以外にも古田理事会日大当局の闘争破壊策動としての欺瞞的学部集会の提起、各学部で行なわれた疎開授

業など、ここで全てを書くには紙面にあまりあるものがあつた。このように一段と激化し、深化した情勢の中で、文理学部では一六日学部集会が教授会と当局によって提起され、文闘委はそれを粉碎し、弾効集会を行なうなどの動きが見られた。そして十二月二三日には、一九六八年最後の全学総決起集会が開かれて、この時期の闘争は一応のおわりを告げる。

#### 間奏曲「二」（十二月二四日―一月三日）

この期間は日大でも表面的な激動はほとんど何もなかったと言ってよいだろう。しかしながら一九六八年度の闘いの激動が何の解決もなしに一九六九年にもちこされ、敵対する双方が新たな闘いにそなえた意味での沈黙の期間といえるのではない。そして、これからおこるべき日大の闘いは、決してこれまでのように日大だけの問題として捉えられるのではなくて、全国の闘う全ての同志によってとりくまれる事になるだろう。それはこの時点ではすでに日本大学全学共闘会議を除いては、全国的闘いは取りくむことができない程で、日大闘争が拡大されていたことを意味しているし、そのことは一九六九年が明けるとすぐに開始された、東京大学における学生運動史上未曾有の壮烈な闘いにおいて十分すぎるほど証明されるであろう。このように、ありあまる程多くの問題を含みつつ一九六八年のスケジュールパワーは幕をとり、日大の学生戦線の上にも一九六九年はあけていった。尚、この間文理学部で、またその他の学部で行なわれた、クリスマスパーティー、も



ちつき大会（三里塚の闘う農民から、もちつきの道具を借りて行なった）等はバリケード内の充実性、内実性を示すものの一つとしてあげられる。

## 第四期 一九六九年 春

拡大（二月四日～二月一八日）

1・8

文理、千葉県成東で疎開授業を始める。文闘委、これに対して現地で阻止行動。

1・9

東大、十日に行なわれる七学部集会をめぐって、全都、全国の闘う学生戦線（日大全共闘も東大全共闘との連帯からこれに全面参加）と闘争の矮小化を計る民主化行動委員会（この日、日共民青は、組織をかけた、全国動員を計る）と、壮烈なゲバルトを展開。夜半、当局の要請により機動隊が出動し、闘う学友五二名を不当にも逮捕。この様な権力と大学当局そして日共民青の醜悪な野合により、この日は、全学バリケード封鎖を貫徹できなかった。

10

秩父官ラグビー場に於いて、東大七学部集会がもたれ、この大学当局の闘争破壊活動を阻止しに向かった闘う学友に対し、官憲の不当な弾圧がかけられ、数多くの学友が逮捕された。そしてこの夜、駒場教養学部

11

於いて、第八本館にたてこもる全共闘と、民青が、またもや激烈な闘いを展開。日大全共闘は、この日も全学園闘争勝利の為に、最も壮烈に闘い抜いた。

東大教養学部に於いて、民青の闘争破壊活動であるデッチあげ代議員大会が開かれ、スト解除決議がとられる。尚、理、農、教育の三学部に於いても、同じような策動が行なわれた。この夜から翌朝にかけても、駒場に於いては闘争の根本的勝利を目指す全共闘と、スト破壊を目論む民主化行動委員会とは、さらに激しい攻防戦を展開した。日共の党組織をかけたの地区細胞、全国動員によって、その圧倒的な物理力によって、全共闘の封鎖貫徹は、またもや阻まれた。なお同夜は、駒場に全力を集中している全共闘の隙をついて、日共民青は全国の闘う学友の象徴となつた安田解放講堂に対し、二〇〇〇名の部隊をもって総攻撃をかけたが、安田の守りは固く、彼らの野望は闘う学友の前に粉碎され、くずれ去つた。

△解説▽

九日から両三日間にかけて東大の本郷、駒場において行なわれた闘う学生戦線である全学共闘会議と闘争の矮小化、闘争破壊を目論む日共民青と

のはなばなしい軍事的全面対決においては、どちらも完全なる勝利を克ち取る事はできなかったが、九日、機動隊にその危機を助けられた日共はその本質を暴露した。そして彼らが東大における教授細胞（日共が、戦後二十年間かけて営々と築きあげ、党の理論的支柱となっていたのが日共東大教授細胞である）を党の組織をかけて防衛するという行為、又、東大に全国の地区細胞を動員するという行為によって、東大そして東大闘争が彼らの組織の為に如何に重要であるかということが証明された。一方、この間の激戦は、東大全共闘、そして日大全共闘を始めとする全国の革命的学友のみが、唯一東大闘争、日大闘争、そして全国の学園闘争を勝利に導くため戦い抜いていくという事を、全人民的に確認させた。尚、この三日間の闘いは、日大全共闘がこれまでの長い闘いで、如何に熾烈な闘争を展開し、そしてその中で学友の一人一人が、確固たる思想性と激烈な闘争精神を確立していったかを証明するものであった。その事は全国の闘う同志、更には激しい攻防戦を展開した民青諸君の胸にも強烈な印象を焼きつけたであろう。

13

農獣医学部農業工学科、福島県で疎開授業を始める。文闘委、成東の疎開授業を再度阻止。

医学部学生総会においてスト解除案可決。

14

東大において労学総決起集会。九日一〇日にひきつづき戦線は更に拡大、この日全国の戦う学生に加えて



反戦青年委員会に結集する革命的労働者諸君との連帯を克ち取る。数千の闘う労働者が、闘う学生と具体的に連帯し、東大本郷の安田講堂前に結集して、共に東大闘争全国学園闘争を闘う事を確認した事は、日本の学生運動史上でも輝かしい出来事であった。この事態に恐怖した大学当局は、学外者の東大構内立入りを禁止、国家権力の出動を要請する。

(三〇〇名)「ガンバレ」「機動隊  
帰れ」のシュプレヒコール。機動隊  
赤門から正門方向へ接近。

13 ・ 05	列品館、重傷者が出たため降伏。しかし、館内から出てくる無抵抗の同志たちに対し、機動隊なぐるけるのリンチ。
13 ・ 30	解放講堂へむけ、激しい催涙ガス弾攻撃。
14 ・ 45	空中からヘリコプター解放講堂屋上

9 ・ 30	10 ・ 00	10 ・ 30	11 ・ 00	11 ・ 15
解放講堂へ向け左側からヘリコプターによる催涙弾攻撃開始。本郷キャンパス周囲は二メートルに三人ていどの割合いで機動隊張り番。正門赤門間の本郷通りは完全通行止め。	総合図書館側から法学部研究室攻撃開始。文学部攻撃開始。	工学部列品館へ催涙ガス弾攻撃開始	文学部陥落。	列品館から火炎ビン攻撃開始。ベ平連の同志三〇人路地から正門前本郷通りへ出てシュプレヒコール、デモ

△一月一八日▽  
東大構内  
6・00—民

開始。規制され農学部方向へ。  
列品館からもうもうと黒煙あがり、  
消防車が到着。

民青、教育学部より石などを運び出し、赤門前路上をはき清めて全員逃亡。

消防車が到着。

法学部研究室屋上で、中核派の同志旗をふりながら演説列品館を激励。

6・30 農学部方面から、機動隊（五〇）タテをかざして正門へ接近。

る。列品館へむけ西側から放水はじま

機動隊、正門前に到着。ヘリコプター上空に飛来。

機動隊、退去勧告の後、西側一階窓から列品館に侵入。

正門前に結集した学友、労働者ら

「消火活動を妨害するものは、鎮火



神田地区一帯

11・00

このころより、東大の急を聞きつけ、全都の闘う学友が武装デモで続々、神田に結集。

8・00

解放講堂裏手一階窓を破り機動隊乱入。

12・30

機動隊解放講堂の二階に侵入、同志二〇人不当に逮捕さる。

11・30

駿河台下、お茶の水の交番襲撃、これを破壊。

8・15

六メートル余の木製防石トンネルを使い、機動隊、解放講堂左右より側面攻撃開始。ヘリ、講堂屋上すれすれまで降りて、催涙ガス液を放射。

1・20

解放放送「いかなる攻撃にも我々は絶対屈しはしない」。不当逮捕された同志連行される。

12・15

中大学館前広場で、全都の学友約二千による総決起集会。東大解放闘争貫徹の方針を大衆的に確認。

9・00

機動隊、放水のみで、攻撃小休止。今井澱・東大全共闘行動隊長、解放講堂屋上より演説。

1・30

講堂内の不当弾圧に対する闘い本格化し、放水ストップ。

13・00

東大へむけデモンストレーション出発

10・20

解放講堂屋上より機動隊にむけ火災ビン攻撃開始。

2・50

機動隊正面から攻撃再開。機動隊、四階に侵入し、正面左側から大講堂を包囲。

13・15

国電お茶の水駅近くで機動隊と激突。聖橋から明大通りへかけ、神田地区一帯で闘う学友ら約五〇〇人と機動隊とのあいだに、はげしい投石戦

10・25

ヘリから催涙ガス弾発射。これを屋上の同志投げ返して応戦。

3・55

屋上の同志たちは、投石を一切中止し、整列。「東大闘争勝利」「機動隊紛紛」のシュプレヒコール。

15・30

明大学館内に連行した刑事を取りもどすため、機動隊、同学館内に乱入。しかし、闘う学友の激しい抵抗に会うや、さらに機動隊員三人を残して退却。

11・02

装甲車で正面から攻撃再開したが、激しい火災ビン攻撃でこれを撃退。機動隊員一人正面バリケード前に接近したが、火災ビン、投石で撃退。放水も止まり、攻撃小休止。

4・02

「加藤一郎代行です。講堂内の学生諸君、これ以上ムダな抵抗を止めなさい」とマイクで呼びかけ。機動隊、右手から講堂五階屋上まで侵入。

16・00

明大通りのお茶の水・駿河台下間で労働者市民も参加して約一万人で機動隊と全面对決。

12・00

さらにツルハシを使用。激しい放水の援護放射のもとに警備車、投石、火災ビン攻撃をおして解放講堂正面に接近、ワイヤ・ロープをバリケードにかけ破壊はじめる。

4・26

機動隊、講堂時計台屋上にまでついに侵入。赤旗をふりつづけた同志を不当逮捕。

18・00

機動隊を聖橋方面へ完全に撃退。各部隊ごとに総括集会を行ない、神田地区街頭闘争の勝利を確認して解散。

12・10

別つぱり出す。

5・44

機動隊、講堂時計台屋上にまでついに侵入。赤旗をふりつづけた同志を不当逮捕。

22・00

機動隊、講堂時計台屋上にまでついに侵入。赤旗をふりつづけた同志を不当逮捕。

5・29

機動隊、講堂時計台屋上にまでついに侵入。赤旗をふりつづけた同志を不当逮捕。

八月一九日

東大構内

7・00 一機動隊の解放講堂攻撃開始。

12・25

投石、火災ビンの激しい攻撃で正面から全機動隊員を撃退。

5・29

機動隊、講堂時計台屋上にまでついに侵入。赤旗をふりつづけた同志を不当逮捕。



神田地区一帯

11・00	中大本館中庭で全都・全国の闘う学友約三〇〇〇が結集して総決起集会
12・00	一八日、列品館で機動隊の催涙銃直撃で重傷を負わされた学友が死亡したとのニュース（誤報）入り、集会に怒りうずまく。
12・15	東大キャンパス解放のデモ、東大全共闘を先頭に出発。
12・40	本郷二丁目交差点で、機動隊と衝突。
12・45	地下鉄お茶の水駅前まで後退し、バリケード構築開始。
13・00	聖橋上、国電お茶の水駅付近など神田地区一帯にバリケード構築。
14・00	解放区は学生・労働者・市民であふれ、士気さかん。
17・40	解放講堂から機動隊お茶の水へむけ移動開始。これに対し、本郷二丁目付近で群衆が投石、機動隊をクギづけ。
21・00	国電お茶の水駅前で、総括集会。闘争の圧倒的勝利を大衆的に確認した。

一・一八〜一九 本郷・神田における闘いの解説

巨大な闘いであった。日本の学生運動史上空前と言っても良い程の闘いであった。この闘いは政治的にも、軍事的にも単なる個別東大闘争とは絶

対に言えない。本郷の闘いに、まず、神田が呼応し、駒場が呼応した。更には京都、大阪が本郷の闘いに呼応した。まさに全国の闘いの全ての拠点。本郷に呼応し、先進的労働者・農民・学生が蜂起した。そして安田解放講堂における革命的同志の闘いと連帯した。それは単なる言葉としての空々しい連帯ではなくして、物理的事実が、街頭バリケードが、激烈なデモンストレーションが、そして闘う者の肉体、その熱い血の一滴までが連帯を保障した。全ての闘う同志は、労働者を問わず、血のさわぎ、肉のうずき、骨のきしみ、そしてそくそくとした魂のどよめきを感じた。そんな闘いだった。

全国の闘う同志が現在の学園闘争、そして学生運動総体の政治的、軍事的な最大集約拠点である東大本郷に集中し、そこにおいて東大闘争を、日大闘争を、そして全国学園闘争を、更には各々に課せられた日本階級闘争の全てを闘った。この闘いは我々自身が持つこれまでの学園闘争の限界性（個別改良主義的自己幻想）を根底的に破壊しつつ、全国の全ての学園に構築されつつあるバリケードを思想的にも、実践的にも、我々のものとして認識せしめる闘争だった。今、この闘いを正確に総括し、正確に評価することは何人にも出来ないであろう。なぜならば、この闘争は、はてしなく長い延長線を持つであろうし、その延長線の随所に今後全国各地で闘われるであろう、幾多の偉大な闘争が展開されるであろうから。ただ、この闘いが闘う同志にとって、また国家権力、政府ブルジョアジーに対して、さらには日本の全人民

に対して提起したいいくつかのテーゼは、語る事はできるだろう。

1・18と19闘争が我々につきつたものは何かそれは東大闘争が全国学園闘争として闘われて来た事、しかも六七年の一〇・八羽田闘争を継承しつつ、我々の日常性そのものを根底的につきくずす、反体制運動の質をはっきり受け継いできたものである。昨年の一・二二における全国学園闘争の結合に始まる全国的闘いは、今年の一・九、一〇、一一、また一・一五そしてこの一八・一九闘争をへる中で、学生同志、更には学生と労働者の間に存在していたあらゆる隔壁をとり去っていった。我々はこの、まさに寝食を共に闘った意味を深く考えねばならない。そしてその中で我々の一人一人は、自己を、全国の闘う労働者との連帯の対象としてゆく為に、自らの側から主体的に自己を変革してゆかなければならないのである。

今回の偉大な闘いは、権力側に対して文字通り、限りなき恐怖を与えた。権力側は、その後退を隠蔽しきれず、二度にわたって「構内立入禁止」期間を延長しなければならなかった。そして現象的にみられる、権力の攻勢に対する我々の拠点防衛としての闘争では断じてない事を確認しなければならぬ。この闘いを拠点闘争として選択したのは我々であり、我々自らの自己変革と体制変革の為に、自らの主体的な全存在をかけた権力への積極的攻撃なのである。そしてそれに恐怖した権力は、一万発の催涙毒ガス弾、放水（催涙毒液）と一万に近い機動隊員を出動させ、未曾有の大弾圧を加えた。そして二日間に本郷神田で七六



七名の同志を不当にも逮捕、就中、本郷で闘った同志に対しては、全員起訴の暴挙を行なった。しかしながら、今回の我々の闘いは、完全な勝利である。現在、東大において「入試」は中止となり、授業はまったく行なわれておらず、すでにいくつかの学部は再度のスト体制に入り、安田解放講堂の奪還に向って、着実な原則的な活動と怒濤の進撃を開始している。そして、このような我々の不屈の攻撃に対し、恐怖し、血迷った国家権力は更なる大弾圧を用意してくるであろう。しかし我々は、それを我々一人一人がはっきりと受けとめて、はねかえさなければならぬ。

我々の同志による本郷における革命的闘いは、全国にテレビを通して実況中継され、茶の間に恐しいまでの生々しい迫力をよんだ。その中で全ての右翼日和見主義者達の行動は「傍観者」「自己温存の第三者」に墮落したものとして位置付けられ、すでに彼らが闘いの中から逸脱したと言う事が全人民的に確認された。

ともあれこの闘いは、日本の全人民に対し「何故にこれほどまで闘わなければならなかったのか」と言う問いかけを發したのだ。そして人々が、その答をみつけた時、彼ら自身、闘う部隊となつてゆくのである。

一九六九年一月十八日、そして十九日の二日間、にわたる、東大本郷において、闘う学生と国家権力との全面対決は、一九六九年度の日本の学生運動の最終決戦として位置づけられるか、それとも七〇年へむけての一九六九年度日本階級闘争の巨大な起爆点として位置づけられるか、それは個人

個人の考え方によって異なるが、この闘いが六八年度闘争と六九年度スチューデントパワーにおける、一つのメルクマールとなったことは、闘う者にとってははっきりと確認できる。

1・20

東大入試中止決定。駒場封鎖解除で東大の全てのバリケードが解除される。

21

全学総決起集会が法学部1号館で開かれ、その後、全国学生ゼネスト、東大奪還総決起集会が中大・大講堂で開かれる。

20

日本大学当局は全学共闘会議に対し封鎖解除命令書を出す。

25

歯学部学生大会でスト解除決議デッチあげ。

26

警視庁一八・一九両日の神田解放区闘争の捜査という名目で、その中心となった日大理工学部、中大学生会館、明大学生会館等に官憲を導入。

中大に於いて闘う学友二九人を、「凶器準備集合罪」「公務執行妨害罪」で不当逮捕。

日大生産工学部津田沼校舎に機動隊五〇〇名乱入。バリケードが撤去され、授業再開される。医学部「二五

日スト解除決議無効」「スト続行決議」がなされる。

27

生産工学部に於いて授業が再開される前に、中にたてこもっていた右翼暴力集団と全学共闘会議が、再封鎖

29

をめぐって乱闘、官憲が導入され、全学共闘会議の闘う学友のみが三九名不当逮捕される。

30

商学部学部集会在世田谷体育館で開かれる。これは明らかに、大学当局の闘争破壊策動であり、当局側が一方的に「バリケード撤去」「授業再開」を宣言。そのまま閉会となる。文理学部ではこの日、これから予想される闘争破壊策動に対してのブロック討論集会が大々的に開かれた。大学当局は教職員組合の委員長檜山和彦以下二名に対し解雇処分を決定。

2・1

日大救援会主催「日大・東大闘争報告集会」開かれる。

2

早朝、法学部・経済学部機動隊導入。大学当局と体育会系学生は機動隊に守られて、両学部のバリケードを撤去する。郡山の工学部に於ては、機動隊に守られた五〇〇名の大学職員、体育系学生が、バリケードを武力で撤去。バリケード内にたてこもっていた十数名の工闘委の学友は、バリケードを死守する為に、彼らに対して徹底抗戦で対応するが、四台の放水車と五〇倍に近い軍事物理力によって全員排除される。革命的に闘った工闘委の学友は激戦の中で全員重傷を負う。この日の午後か



ら、神田、お茶の水では、法・経両学部、工学部の奪還闘争が始まる。理工一号前での集会後、明大通りを大々的にデモンストレーション。その後お茶の水駅構内での集会を勝ち取るが、すぐに機動隊の弾圧を受ける。

前日に続き、法・経両学部奪還闘争。官憲の露骨な弾圧により学友数名逮捕さる。

歯学部スト解除。

沖縄のゼネストに呼応して、全国学園闘争勝利の為の総決起集会が中大大講堂で行なわれる。この日は東大本郷解放区奪還闘争が提起されていたが、官憲の露骨な弾圧政策により、実現することができず、「解放区」通りをデモンストレーション。

文理学部、第二回ブロック討論集会開かれる。この日も法・経奪還闘争が行なわれ、両学部前の集会・デモを勝ちとる。

文理学部、陸上競技場において学部集会在学校側より提起され、約三〇〇名参加。授業再開決議が強行採決され、右翼体育系学生七〇名のみが賛成の挙手をする。しかしながら大学側は、反対の意見や決議を採らず、強引に金子学部長代行は授業再開を宣言する。この後、大学側のあまりの暴挙に、一般学友の中から自

然発生的にデモの隊列が生まれ、二〇〇〇名の隊列となる。その後、一五〇〇名の学友により、文理解放区内の大講堂に於いて、教授会に対する弾劾集会をかちとる。

商学部では、再度の学部集会在開かれ、スト解除、授業再開を決議、バリケード撤去される。

一日付で解雇された日大教職員組合委員長以下二名は、「身分保全」「賃金支払」の仮処分を東京地裁に申請すると共に、都労委に救済を申し立てた。午後四時頃、日大歯学部では、校舎のバリケード破壊を實力で行使した約一五〇名に対し、全共闘五〇名の学友が抵抗したが、官憲の弾圧を受けて排除される。

全学総決起集会在中大で開かれ、理工空地へ向けデモを行う。

農獣医学部、鶴ヶ丘高校でグラウンド学部集会在開かれる。

芸術学部、官憲導入。権力の弾圧は二名の学友を不当にも「窃盗罪」で逮捕し、バリケードを撤去する。

経済学部事務次長寿乃田が、業務上横領の疑いで警視庁より任意出頭を求められる。日本大学の腐敗堕落しきった内情が再度、日本全人民の前に暴露され確認される。

「日大闘争勝利・労・学・市民五万

人集会」が中大・中庭で開かれる。

この集会是、日大全共闘がはじめて日大闘争勝利の為に全人民的な動員をかけた集会であり、二万人を越える先進的な労働者・学生・市民の結集を勝ち取り、一一・二二そして、一・一五さらには二・四の大集会是はるかにしのぐ盛大さをほこった。

日大全共闘議長・秋田君以下書記長・田村君や工闘委々員長・大塚君等の発言、そして羽仁五郎氏による講演等があり、中大中庭は闘う同志の熱気で満ちあふれた。この日は文理学部の一五〇〇名をはじめとして、日大生の部隊だけでも五〇〇〇名を越える結集を勝ち取り、日大全共闘は不滅であることを事実として確認した。同じ頃、両国日大講堂においては、この日から始まる農獣医入試にそなえ六〇〇名の機動隊が付近に待機し、会場にも警戒体制をしいた。このことは、大学当局、そして国家権力が日大全共闘の力をいかに恐怖しているかを物語っている。

大学当局は、経済学部部長名で現在、失踪中の元同学部会計課長富沢広を業務上横領で告発したが、これは、大学当局が、その腐敗した経理の乱脈さを古田体制そのものからが一会計課長個人の問題に転化し、矮小化



していることを示している。

商学部授業再開。

津田沼生産工学部闘争委員長近藤敏君逮捕さる。

文理学部では、文闘委が教授会との学部団交を提起していたが、一切を暴力的に制圧しようと目論む教授会当局は、出席を拒否。

学友はキャンパスで集会を開く。芸術学部奪還闘争。芸闘委ではこの日、奪還闘争を提起し、武蔵大学で奪還集会を開いた後、芸術学部奪還にむかった。西武線を制圧し、雪の舞う中で街頭バリケードを構築し、はなばなしい闘いを展開したが、機動隊のガス弾による弾圧を受け、六時前に散会した。

大学当局は本部の封鎖を實力で解き、本部は八カ月ぶりに全共闘の手から奪われた。

18 早朝、日本大学全学共闘会議の最後の砦であり、最大の拠点であった文理学部に官憲が導入された。この日数千名の機動隊は、圧倒的な暴力をもって、闘いの象徴であるバリケードを撤去し、大学当局は力による闘争圧殺を最後まで貫徹した。

尚、この日に予定されていた、全学学生全学教授会との総団交は大学の暴力的方針によって拒否され、学友

# △解説▽

は日大闘争勝利報告集会に結集した。

日本大学全学共闘会議の最大の拠点であり最後の砦である文理学部のバリケードが、二月一八日の朝、機動隊の導入によって陥落したところでの日大闘争史はひとまず終る。しかしながら一九六八年から一九六九年にかけて日本のあらゆる全人民に数々の問題提起をした。日大闘争叛逆の記録は、これで終わったわけでは決してない。むしろ真の日大闘争は、この一九六九年春から激動の七〇年にかけて巨大なる展開をはじめ、これまでの日大闘争叛逆の歴史は、言ってみればその一つの大きな序曲であり、これから真の権力との全面的な対決が新たに展開されてゆくのだ。しかし、この文理学部のバリケードを最後に、日大の全てのバリケードが権力の血の弾圧によって撤去された時点が、一つのはっきりとしたメルクマールとなる事は明らかである。そしてこれからは日大革命の新たな序曲が始まるのだ。

この時期、その前期は文学どおり日大闘争が東大闘争との結合から全国学園闘争の巨大な一環となって全人民的に問われた。いってみれば、東大闘争全学共闘会議と日本大学全学共闘会議を結ぶ一本の紅い糸が中大、上智大をはじめとする全国の闘う学友、さらには労働者、農民をもまきこみ巨大なる階いを構築し、展開していった時期であったしかし、その後期において権力は、個別的でなくなった。我々の闘いに恐怖して、あらゆる弾圧を我々に加えてきた。日本大学の各学部をはじ

めとする全都・全国の数々の闘う大学には機動隊が連日の如く導入され、バリケード破壊を行なった。

闘いの当初から、全共闘の闘争圧殺をもくろむ日本大学古田理事会は各学部の教授会をもまきこむ形で完全な居直りを示し、闘争破壊を企てた。その策動はますますファシズム化する国家権力にのった形で、一部の右翼暴力集団と自己温存の日和見主義者をつかって、一方的なスト解除、授業再開を決議をとった。そしてまた一方では、そのような策謀をはかりながら機動隊導入の口実をつくり、学内捜査等の名目で各学部に連続的に機動隊を導入し、バリケードの撤去を行なっていた。

しかしながら闘いはまだ終わっていない。「血の5・13」を想起せよ。～「殺りくの6・11」を注視せよ。～問題の本質は何ら解決していない。古田体制は依然として残っているし、また日大は過去の腐敗墮落した暗黒の日大そのままなのだ。そして闘う主体の全学共闘会議には、依然として数千の部隊がいる。まさに日大革命はこれからなのである。そして全学共闘会議は今も進撃をつづけている。解放区奪還にむけて、再度の全学バリケード封鎖にむけて。再度の大衆団交Ⅱ人民裁判にむけて、そして五大スローガン、九項目要求完全貫徹に向けて・偉大なる日大革命の勝利に向けて。新たな序曲はすでに始まっているのだ。

尚、全共闘最後の砦、文理学部のバリケードが落ちた日は、東大本郷解放区において偉大な闘いがくまれてから丁度一カ月の日数をかぞえる。